

Kasugai City Philharmonic Orchestra

第17回 春日井市交響楽団 定期演奏会



2008年7月6日(日)
開演 15:00
春日井市民会館

ごあいさつ



ごあいさつ

春日井市交響楽団
名誉会長

春日井市長
伊 藤 太

このたび、第17回春日井市交響楽団定期演奏会が盛大に開催されますことを心よりお慶び申し上げます。また、貴団の活動は、市民文化の創造をまちづくりの大きな柱とし、「文化でつながるまち春日井」を目指しております本市にとりまして、誠に心強く、深く敬意と感謝を表する次第でございます。

本演奏会は、毎回優れた国際的な演奏家を招聘し、市民の皆様にクラシック音楽に親しんでいただく場として、また、学生と社会人により結成されたメンバーが日々研鑽を積み練習に励んだ成果を発表する場として、本市の音楽文化振興になくてはならないものであります。

今回は、国際的にオペラをはじめとして様々な分野で活躍されている草川正憲氏の指揮にのせて、イタリアの俊英パスクアーレ・イアンノーネ氏の繊細で抒情的なピアノ演奏と管弦楽が織りなすハーモニーが、来場者の心奥深くまで響き渡り、至福のひとときをもたらすことあります。

おわりに、出演者の皆様をはじめ関係各位の一層のご活躍を心から祈念申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



ごあいさつ

春日井市交響楽団
会長

中部大学 学監
三 浦 昌 夫

春日井市交響楽団の第17回定期演奏会によ
うこそおいで下さいました。いつも、音楽都市春日
井の市民のみなさまに、12月の「春日井市民第
九演奏会」とならんで、7月の定期演奏会で「名
曲の名演奏」をお聴かせするのが、私たちの使
命であり喜びです。

今回は特に、ムソルグ斯基の「はげ山の一
夜」をはじめ、ロシア音楽の名曲ばかりをそろえて
演奏いたします。特にチャイコフスキーの「交響
曲第5番」は、金管楽器が活躍する豪快な音楽
です。また、ラフマニノフの「ピアノ協奏曲第2番」
では、ソリストに、いま国際的に活躍中のパスク
アーレ・イアンノーネさんをお招きしました。パスク
アーレさんは、先の6月30日にアメリカのカーネ
ギーホールで演奏を終えての来日です。いつもな
がら、わたしたちの定期演奏会は、「春日井の世
界に開かれた音楽の窓」としての役割も十分に
果たします。

ベテランの指揮者草川正憲さんも、春日井市
交響楽団と初めての協演です。なんども練習を
重ねて、本日を迎えました。草川さんの熱心で緻
密な音楽作りが交響楽団のメンバーの熱演を生
み、名曲の素晴らしさを十二分にお楽しみいただ
ければ幸いです。

では、最後までごゆっくりお聴き下さい。

プログラム Program

ムソルグ斯基 (1839~1881)

M.Mussorgsky

交響詩 はげ山の一夜 二短調

(リムスキー・コルサコフ編曲)

Night On The Bare Mountain

ラフマニノフ (1873~1943)

S.Rachmaninoff

ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調

Piano Concert No.2 in C minor Op.18

—————《休 憩》 Intermission ————

チャイコフスキー (1840~1893)

P.I. Tchaikovsky

交響曲 第5番 ホ短調

Symphony No.5 in E minor Op. 64

第1楽章 Andante - Allegro con anima :ややゆっくり-活気をもって速く

第2楽章 Andante cantabile, con alcuna licenza :ある程度の自由さをもち、ややゆっくり、うたうように

第3楽章 Allegro Moderato :中くらいに速く

第4楽章 Andante maestoso-Allegro vivace :ややゆっくり、威厳をもって-活気をもって速く

ピアノ独奏 パスクアーレ・イアンノーネ

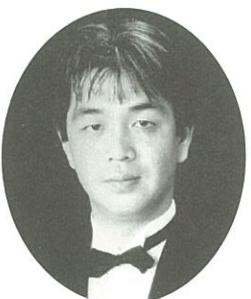
指 挥 草川 正憲

演 奏 春日井市交響楽団

プロフィール



ピアノ独奏
パスクアーレ・イアンノーネ



指揮
草川正憲

国際的に活躍をつづけている話題のイタリアのピアニスト。1984年に南イタリアのパリのプッチーニ音楽院を卒業。巨匠アルド・チッコリーニとマリア・ゾンマに師事してナポリ・ピアノ奏法を学びました。1987年にロンドン国立音楽院でディプロマを得ました。その後、ナポリの「カセラ国際ピアノ・コンクール」やアメリカの「ジーナ・バッチャー国際ピアノ・コンクール」など多くのコンクールで優勝や入賞を重ね、その音楽性と技術は多くの賞賛を得ています。レパートリーは、ピアノへの名曲の「トランскレピション」(編作)得意として、リストの「ベートーヴェン交響曲第7番」や「プレリュード」をはじめ、ローゼンタールによる「ヨハン・シュトラウスワルツ集」はCDでも人気を博しています。近代・現代音楽も得意として、特にチャイコフスキーやラフマニノフの演奏では定評があり、2000年に録音したCDは年間ベスト・ワン賞に選ばれました。イタリアはむろんのこと、海外の有名オーケストラと協演して、ドラマティックな協奏曲ピアニストとしても優れた演奏を聴かせてくれます。

東京音楽大学音楽学部指揮科卒。指揮法を紙谷一衛、故松本紀久雄の両氏に師事。在学中より主にオペラ指揮者として研鑽を積む。大学卒業後、活動の場をオペラ以外にも広げ、様々な分野の公演を指揮する傍ら、藤原歌劇団に所属しオペラ指揮法を故 福森湘氏に師事。数々の来日イタリア人指揮者のアシスタントを務め、イタリアオペラへの見識を深める。その後、単身イタリアへ渡り、ダニエレ・アジマン氏のもとで研鑽の日々を送る。また、ハンガリーにてユーリ・シモノフ氏に師事し、ディプロマを獲得するなど、管弦楽の分野へも視野を広げる。2001年、ミラノにおいてヴェルディ作曲歌劇『椿姫』を指揮し、デビューを飾る。同公演を観劇に来ていたアルノルド・マントヴァーニ音楽アカデミー校長のカーティア・ロロヴァ氏に招聘され、同アカデミーの専属指揮者に就く。在任中にヴェルディ『イル・トロヴァトーレ』、マスカーニ『カヴァレリーア・ルスティカーナ』、プッチーニ『トスカ』等を指揮する。2005年4月に帰国、モーツアルト『レクイエム』、ベートーヴェン『交響曲第9番』等を指揮。その後も数々のオーケストラ、吹奏楽団、合唱団を指揮し好評を博す。また8年間のイタリア滞在生活を活かし、イタリアオペラ指揮者として活躍。2006年から現在までにプッチーニ『蝶々夫人』『ジャニ・スキッキ』、ドニゼッティ『ランメルモールのルチア』、ベッリーニ『ノルマ』、チレア『アドリアナ・ルクブルール』、レオナルド・レオナルド『道化師』、ヴェルディ『リザ・ミラー』『仮面舞踏会』等々、数々のイタリアオペラを精力的に指揮。今後もイタリアオペラを中心に指揮活動を続ける。2001年9月、イタリアのペスカラで行われた『第6回マリオ・グゼッラ国際指揮者コンクール』にて3位に入賞。

オーケストラ 春日井市交響楽団 Kasugai City Philharmonic Orchestra

市民オケである春日井市交響楽団は、ベートーヴェンの「第九交響曲」の演奏会を春日井市で開きたいという市民の思いから生まれました。それを受け、「市民が演奏し・市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」として、市内の音楽愛好家を中心には、1990年(平成2年)11月に創立されました。愛称『カボ』(KAPO)は英字名称「KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA」の頭文字をとったもので、イタリア語の「カボ」(capo 頭・先頭に立つ者)の思いもあります。毎年、7月の定期演奏会と12月の「春日井市民第九演奏会」を中心に、数多くのオーケストラ活動を行っています。団員は、会社員・公務員・教員・医師・主婦・学生・自営業者などからなる60名。私たちにとって最大の喜びは、一人でも多くのみなさまに演奏会においでいただき、音楽を聴く喜びとともにクラシック音楽が好きになっていただくことです。そのために、「春日井で名曲の名演奏を」と心がけています。また、「春日井の開かれた音楽の窓」となって国内外の最高の音楽家との共演にも努めています。これからも、さらに、市民のみなさまに親しみ、愛されるカボとして、市民音楽活動をつづけて参ります。温かいご支援をお願いいたします。

曲目解説

この第17回春日井市交響楽団定期演奏会は、ロシア音楽の名曲を三つ集めました。
どれも、フルオーケストラならでは豊かな響きと表現力の豊かさを十分に發揮できる作品ばかりです。
春日井市交響楽団が、練習を重ねて春日井市民のみなさまにお贈りするオーケストラの魅力の数々をお聴きください。

音楽監督 都筑正道(中部大学教授・音楽美学)

交響詩「はげ山の一夜」

モデスト・ムソルグ斯基
(1839-1881) 作曲

権謀術策に満ちている音楽史の中で、「ロシア五人組」の存在ほど心安らぐものはないでしょう。指導者バラキレフ(1837-1910)を中心にして、キュイ(1835-1918)とムソルグ斯基(1839-1881)とボロディン(1833-1887)とリムスキーエコルサコフ(1844-1908)は、深い友情で結びついていました。彼らは医師や軍人や教授たちで、音楽以外の職業をもったアマチュア作曲家でした。ロシア固有の文化と風土を西欧化から護るうとする五人の考えは、「反西欧・反専門・反楽界」に徹しました。大地主の貴族の家に生まれたムソルグ斯基は、ピアノを得意とする若者として育ちました。貴族の使命として軍隊に入りましたが2年いただけで音楽に専念するようになりました。ムソルグ斯基の代表作は歌劇「ボリス・ゴドノフ」(1871年初稿)ですが、失敗に終わったので、友情にあついリムスキーエコルサコフが、自作に充てる時間を割いて改作してその真価を問いました。

この交響詩「はげ山の一夜」も、ムソルグ斯基の歌劇的な手法が十分に発揮された優れた小品です。もともと、1860年頃にメグデンの戯曲「魔女」を歌劇にした『はげ山』構想がありました。ムソルグ斯基は、まずピアノ曲「聖ヨハネ祭前夜のはげ山」を書きました。これをリムスキーエコルサコフが、一般的のオーケストラ用に編曲をしています。最近では、ムソルグ斯基の原典版も使われるようになりましたが、華やかさではどうしてもリムスキーエコルサコフ版にかないません。「夏至を祝う6月の聖ヨハネ祭の前夜に、魔女たちがはげ山に集まって大騒ぎをする」といわれています。「聖ヨハネ祭」は、シェイクスピアの「夏の夜の夢」やワーグナーの『ニュルンベルクのマイスター』の舞台となっています。ベルリオーズの「幻想交響曲」の第4楽章「ヴァルブルギスの夜」(サバトの夜の夢)は春の出来事ですが、山のなかで魔女の酒宴が行なわれます。ウエーバーの歌劇『魔弾の射手』のオオカミ谷の場も山中での魔女の跋扈する様子を描いています。一騒ぎした魔物たちは、夜明けとともに消え去っていきます。

ピアノ協奏曲第2番

セルゲイ・ラフマニノフ
(1873-1943) 作曲

ナポリ・ピアノ奏法の名手パスクアーレ・イアンノーネさんは、現在屈指のラフマニノフの弾きでもあります。イアンノーネさんの現代的な演奏で、ラフマニノフの作品の素晴らしいしさをあらためて知る良い機会となることでしょう。

ラフマニノフは、「靴の中の足の指でペダルを微妙に踏みわけることができた」といわれるほど繊細な感覚を持った技巧派

のピアニストでした。また、『音楽ギネス・ブック』には、「世界一大きな手をしたピアニスト」としてイラスト付きで紹介されています。2メートルの長身の彼は、一度に12の白鍵に手が届き、左手は「C-Es-G-C-G」の音をとることができました。あのダイナミックなピアニストのリストでさえ10度が精一杯だったのですから、ラフマニノフの作品がいかに独特な個性をもったものであるかがよくわかります。

恋人たちの悲恋を歌う映画音楽にも使われるほど、甘美なメロディとの陰影ある音色をもつこの「ピアノ協奏曲第2番」は、今世紀を通じて最高の人気をもつピアノ協奏曲です。作曲者のセルゲイ・ラフマニノフは、ロシアの貴族の家庭に生まれました。幼い頃から母親にピアノを習い、9歳(1882年)の時にペテルブルク音楽院に入学するほどの天才ピアニストに育ちました。大成して、チャイコフスキーやストラヴィンスキートとともに、この都市ペテルブルクで育った大作曲家の一人に加えられました。しばらくして(1885年)、彼の従兄でリストの高弟であったアレクサンダー・ジローティの勧めでモスクワ音楽院に移りました。ラフマニノフは卒業作品の歌劇『アレコ』(1892)で金賞をとりました。この作品を絶賛したのは、モスクワ音楽院と深い関わりをもっていたチャイコフスキーやでした。彼はラフマニノフを自分の後継者だと思っていましたし、また、ラフマニノフのモットーも、「チャイコフスキーより還れ」でした。二人は、色彩的な衣装を身にまとい保守的な銀の杯でセンティメンタルなスラブの涙をすりあった、最後で、また最高のロシア・ロマンティストであったといつていいでしょう。このピアノ協奏曲第2番の第2樂章で、ラフマニノフは、チャイコフスキーやの交響曲第5番の第2樂章の主題を用いています。

作曲家として恵まれたスタートを切ったラフマニノフでしたが、24歳のときに不幸な事件が起きました。彼が自信をもって書き上げた「交響曲第1番」がグラズノフの指揮で初演されましたが、これが大変な不評だったのです。原因はグラズノフが酔って指揮したからだともいわれていますが、この騒ぎでラフマニノフは完全な神經衰弱におちいり、あらゆる音楽活動が全くできなくなってしまいました。その後を救ったのが、モスクワの神經科医ニコライ・ダール博士でした。博士は、「お前は協奏曲が書ける。素晴らしい協奏曲が書ける。きっと書ける」と彼に暗示をかけつけたのでした。この魔法の呪文から「ピアノ協奏曲第2番」が生まれました。私たちがこの協奏曲に特別「カタルシス」(精神的な安らぎ)の思いを感じるのも理由のないことではないのです。作曲者自身のピアノとジローティの指揮するモスクワ・フィルの演奏で初演されたのが、20世紀を飾る最初の年の1901年でした。

100年以上経った21世紀の今も、この曲の人気はまったく衰えていません。それは、奇妙な音階や不協和音や不器用なリズムからなるいじわるで不可解で術学的な現代音楽と違って、だれの心にも伝わる感傷的な甘いメロディと短調と長調だけからなる古典的な和声進行ときらびやかな音色と節度あるおだやかなリズムでできているからです。長らく私たちが忘れていたプロフェッショナルな鍵盤の名人芸がここにあります。